

## 下田路子さんを悼む

梅原 徹 ((株) 建設環境研究所)

### 突然の訃報

4月22日、広島吉野由紀夫さんから電話で、下田さんが前日に亡くなられたことを知らされた。私より二つ年下なので、「えー、何で」と返さざるを得ないほど、思いもよらない、突然の訃報だった。新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念され、緊急事態宣言の発令下、ご葬儀もご家族だけで営まれるとのことでお別れにも伺えず、歯がゆい思いをしていたところへ編集委員会から追悼文の依頼があった。私が適任とはいえないかもしれないが、四半世紀余りのおつきあいから下田さんを偲ぶことにした。

### 下田さんの略歴と私とおつきあい

実は直接のおつきあいがいつから、どこで始まった

のかの記憶がない。何か手がかりをと、彼女から送られてきた論文の別刷や報告書のファイルを探すと、いくつかの手紙が挟まっていた。もっとも古かったのは1992年3月付だったが、内容的にこれが最初とは思えないので、頂いた別刷の日付から考えると、たぶん1980年代の半ば以降に生態学会の大会あたりでおつき合いが始まったのだろう。

きっかけはともかく、親しくなったのは彼女が1991年に私と同業のコンサルタントに就職されて以降である。ここでそれまでの経歴を彼女の自伝ともいえる「水田の生物をよみがえらせる－農村のにぎわいはどこへ」(下田2003)から拾ってみよう。

1951年、広島県山県郡大朝町生まれ、1969年、高松校3年の2学期に吉良竜夫先生が生態学や自然保護に



植生学会賞受賞時の記念講演で挨拶される下田さん(2011年9月25日、神戸大学)

ついて書かれた新聞記事を読み、生態学へ進みたいと考えられたそうだ。1970年、広島大学理学部生物学科に入学、卒業研究では郷里、大朝町の湧水湿地植生を調べられた。学部卒業と同時に結婚されたが修士、博士課程へ進学され、広島大学の統合移転先、西条盆地の水生・湿地植生を対象に研究された。

1977年、博士課程在学時にご長男を出産され、1984年に博士の学位（Shimoda 1985）を取得後も広島大学の研究生や非常勤講師をしながら研究を続けられていた。

二人のお子さんを育てながら家庭生活だけでなく、研究生生活が続けるのは、今とはちがって大変だったことと思う。そんななか、1991年に広島市の東和科学株式会社で植物の専門家として入社された。先に触れた1992年3月の手紙には「仕事は専門を生かして欲しいが、植物のことだけを考えていけばすむというものではないので、勉強することも多い。」と書かれている。

この頃から同業ということだけではないのだが、あちこちで関わりが深まった。1995年2月、植生学会の前身、群落談話会と日本環境アセスメント協会の共同主催、「環境アセスメントにおける植物評価の課題と保全対策」で一緒に話題提供したのがたぶん最初、翌年には滋賀県琵琶湖研究所の第14回琵琶湖研究シンポジウム「農山村地域の生物と生態系保全」でも一緒に話題提供している。1996年に出版された「河川環境と水辺植物」（奥田・佐々木編1996）では第II章、水辺植物の特性で彼女が抽水植物と浮葉植物の特性、私が河川の植物を分担して執筆した。こうしたなか、必然的に調整することもあったので、やりとりやお話しする機会も増えたようだ。

植生学会が発足した1996年以降は毎年、お目にかかる機会が増え、編集委員を2期6年、表彰委員を昨年までの3年間ご一緒した。また、長く副会長を務められていた水草研究会の大会でも、しばしばご一緒する機会があった。

そうしたおつきあいのなか、一緒に食事する機会も何度かあり、2005年、広島で植生学会が開催されたときは、お好み村でご馳走になった。お返しは2011年の神戸大会、この年、下田さんは植生学会賞を受賞されたが、お祝いに神戸元町の中華街で夕食を共にした。意外なことに、食べられないものが多かったのも、印象に残っている。肉はだめ、魚も生はだめという具合で、メニューは限られた。話題は仕事に限ら

ず、個人的なことや家庭のことまで幅広く、どちらかといえば私が聞き役になることも多かった。

2005年3月、東和科学を退職され、同年4月から静岡の富士常葉大学環境防災学部に教授として赴任された。ようやく大学に職を得られることになったが、必然的に単身赴任である。二人のお子さんも成人されたので、踏み切られたのだろう。遠方の私学、しかも我々が学んだのとはまったく異なる時代の大学教育や学生指導には戸惑われることも多かったようで、いろいろおもしろいお話も聞かせていただいた。

ところが途中で突然にご主人が倒れられ、生活の維持も彼女の肩にかかるようになる。結局、静岡での単身赴任は2017年3月、定年退職されるまで続くことになったが、ご苦労も多かったようだ。

### 下田さんの仕事

学部以来、湿地や水生植物の植生を研究対象とされることが多かったので、下田さんといえば水草というのが定番で、事実、最後まで水草には興味を持ち続けられた。水草と水質、環境という生態学的な関係だけでなく、分類にも気を配られ、西条盆地でのベニオグラコウホネやサイジョウコウホネの発見と記載（下田1991）、後者は後に雑種としての再定義（Padgett et al. 2002）といった分類学的功績もある。

コンサルタント時代の仕事といえば、1997年からの大阪ガスの液化天然ガス基地建設計画に伴う、福井県敦賀市中池見の調査と保全にかかわる仕事（下田1998など）を抜きには語れない。企業に属するコンサルタント個人の仕事は基本、あてがい扶持である。仕事にかかわるか否かの選択肢は個人にはない。それでも当時、私は下田さんに中池見にかかわることを断るように勧めた。「水田の生物をよみがえらせる」を贈っていただき、そのお礼と感想を書き送った返事が残っていた。「193ページに登場する、仕事を断るように忠告してくれた友人とは梅原さんのことです。いろいろ心配してもらいありがとうございました。」

私は1999年の秋に一度だけ下田さんに中池見を案内してもらった。低湿地性のタデの1種を見ることが目的だったが、ひととおり、全域も回った。後に彼女はメールで、「自然保護を口にする、一般の人もマスメディアも、無条件に正義の人と受け取り、主張を真に受けてしまうように思います。冷静に何が真実なのかを見てほしい」と書いてきた。

私が心配するまでもなく、彼女は立派に調査と保全

対策の検討をつとめあげた。結局、中池見の開発計画は中止になり、敦賀市に移管された現在は地元のNPO法人によって管理されている。

私自身は下田さんの仕事のうち、古文書と絵図に記録された広島県賀茂郡黒瀬町の景観と植生の変遷を歴史学者と共同して明らかにされたのが、いちばんのお気に入りである（下田 2004・2008）。1980年代半ば以降、里山はブームになったものの、その成り立ちは歴史科学的に追及されたものではなく、情緒的に想像されたものが多かった。里山の成り立ちを知るには、歴史資料の発掘と活用が欠かせない。この仕事も、冷静に何が真実なのかを知りたいという彼女の研究姿勢にもとづく成果なのだろう。

下田さんから送られてきた別刷や報告書を数えてみると80篇に及ぶ。単行本も3冊、これで全部ではないだろうが、かなり多作である。とくに水草研究会誌には調査報告以外にも、海外の学会に出かけられた折の紀行文が多数投稿されていて、楽しく読むことができる。某国の某氏にフィールドを案内してもらったが、酔っ払って運転するので、隣に座っていて気が気ではなかったなど、活字にできないこともいろいろ聞かせてもらった。

そんな彼女と、もう会えない、話もできない。静岡から広島に戻られて以降、体調がすぐれないことは2018年の秋、宇都宮大学での植生学会の折にお聞きしていた。それ以降、お目にかかる機会はなく、昨年

11月9日のメールが最後になった。本来は自分が果たすべき役割なのだが、体調がすぐれないので、私に代わってほしいという内容で、代役をお引き受けするという返信をしたところ、とても感謝するという短い返信が届いた。ふだんと違う弱気が感じられてすこし気にはなったが、静養されれば回復されるものと信じていた。とても、とても残念です。どうぞゆっくりお休みください。

## 文献

- 奥田重俊・佐々木寧（編）1996. 河川環境と水辺植物—植生の保全と管理—. ソフトサイエンス社, 東京.
- Padgett, D.J., Shimoda, M., Horky, L.A. & Les, D.H. 2002. Natural hybridization and the imperiled *Nuphar* of western Japan. *Aquatic Botany*, **72**: 161-174.
- Shimoda, M. 1985. Phytosociological Studies on the vegetation of Irrigation Ponds in the Saijo Basin, Hiroshima Prefecture, Japan. *Jour. Sci. Hiroshima Univ. Ser. B, Div. 2 (Bot.)*, **19** (2): 237-297.
- 下田路子 1991. 広島県西条盆地のコウホネ属植物. *植物地理・分類研究*, **39**: 1-8.
- 下田路子 1998. 福井県敦賀市中池見の農業と植生, および維持管理試験について. *植生情報*, **2**: 7-18.
- 下田路子 2003. 「水田の生物をよみがえらせる—農村のにぎわいはどこへ」. 214 pp. 岩波書店, 東京.
- 下田路子 2004. 史料から読みとる黒背の生き物と村人のくらし. 「黒瀬町史第2巻 資料編」(黒瀬町史編さん委員会編), 26-69. 黒瀬町.
- 下田路子 2008. 農村の植物と人間の活動. 「寄生と共生」(石橋信義・名和行文編著), 264-288. 東海大学出版会, 秦野.